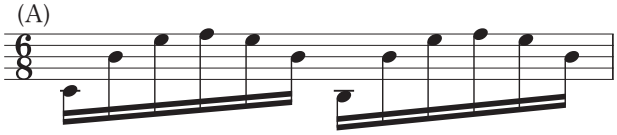
連桁符尾の向き

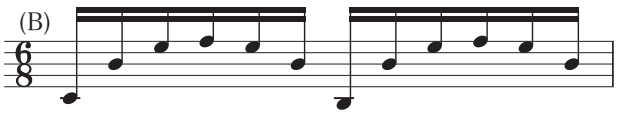
今回もテッド・ロス氏の著書から例を採ります。連桁でつながれた音符の符尾が、どういった基準で上向き、または下向きになるのかという問題です。六つの 16 分音符の符尾が譜例 (A) のように下に向くか、または (B) のように上に向くのかということですが、本例は「どちらも正しい」と言えそうです。五線の第３線が境界線となることは単一符尾の和音の場合と同様ですが、それより上の音が過半数を占めるので下向きとするのが (A)、境界線より最も遠い音が下にあるので上向きとするのが (B) です。

氏の見解では (A) が第一選択で、いわば過半数基準が優先されます。対して Finale では最遠隔音基準が第一選択とされているので、デフォルトでは常に (B) が出てきます。

(A)

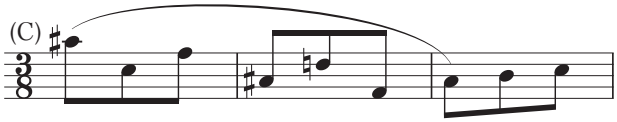


(B)

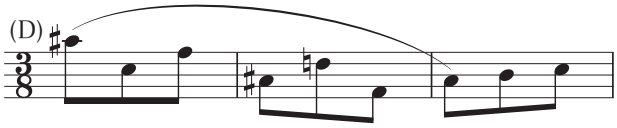


一般に連桁符尾の向きも極めて曖昧に、かつ柔軟に扱われがちです。(C) と (D) の譜例が象徴的です。２小節目では境界線より下の音符が２つ在って過半数を占めており、境界線より最も遠い音も第1間上に在るので、どちらの基準を採るにせよ (C) のように上向き符尾となるはずです。ところが、ここでロス氏が推奨するのが (D) の下向き符尾でして、彼はスラーがその根拠だと主張しています。確かに、(C) では特に２小節目３拍目の符尾がスラーと衝突しそうで、曲線の調整を要します。この音群は同じ向きを保つべきかもしれません。

(C)

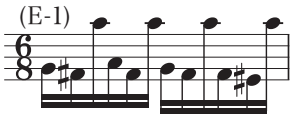


(D)

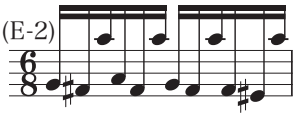


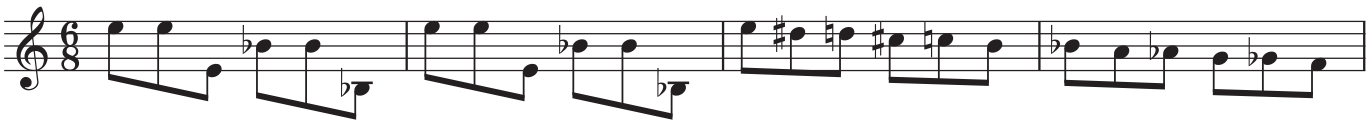
もっと興味深いのは例 (E) です。ここでも２つの基準がぶつかりますが、ロス氏は (E-1) を良しとしています。(E-2) の過半数基準による上向きとすれば、「多くの符尾の森が離れた音の符尾を隠してしまう」と彼は言います。符尾を英語で Stem と言いますが、「幹」や「茎」という意味ですので、洒落なのでしょう。(E-1) の方が突出した音が明瞭になるので、実際にアクセントを添えて弾くか否かは別にして、視奏しやすいと思われます。

(E-1)

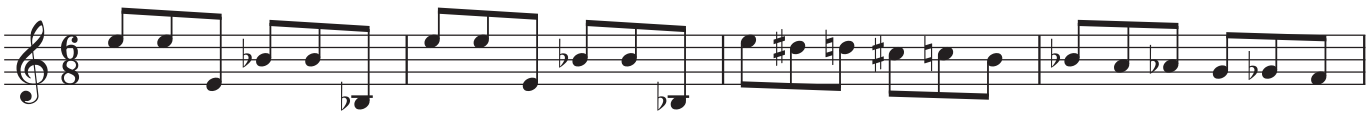


(E-2)





上の譜例はテデスコ作曲の「タランテラ」というギター曲の一部で、リコルディ社版を再現したものです。ここでは全ての連桁符尾が下向きに統一されていて、急速な下降音型によく馴染んで見えます。しかし過半数基準優先なら、1、２小節目は冒頭と後続とで向きが違ってくるべきものです。さらに４小節目は、２つの基準のどちらを採用しても２つ共に上向き符尾となるべきところを、強引に下に向かせているといった感じです。最遠隔音基準を第１優先とする Finale が最初に決めてくる向きをそのままにして、連桁の微調整を加えた譜を下に載せましたが、優劣は明らかではないでしょうか。

もっとも、特に独奏の場合は、練習を積んでいく内に楽譜の姿など、実は大きな意味を持たなくなってくることも事実でしょう。こういった事柄はその第１印象に関わるものに過ぎないということも、確かにそれが音楽家一般の常識かとは思いますが、一つの手工芸として大事にしたいと考えています。

2010 年 4 月　梅本雅弘